

東京バッハ合唱団 月報

[第 707 号] 2021 年 5 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101
Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3- 47604
Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.707

May 2021

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

〔既刊楽譜〕「バッハ・カンタータの場景」—— 作曲アイデアの素材から見渡してみる 復活節の場景 (2)

大村 健二 (団員)

- ・BWV 42 《同じ安息日の夕べ》 復活節後第 1 日曜日用
- ・BWV 67 《留めよ心に 主イエスを》 同上

今回は、復活節 (イースター) の 3 連休の祝日のうち、初日 (日) と 2 日目 (月) の礼拝で上演されたカンタータ (BWV 4、BWV 6) をとりあげました。今回は、その翌週、「復活節後第 1 日曜日」のために作曲された 2 作品を紹介します。

当然のことですが、教会暦上「〇〇節後第〇〇日曜日」と定められていても、聖書の出来事の展開に、そのまま沿っているわけではありません。

BWV 42 は器楽シンフォニアに始まる作品で、歌詞は第 2 曲にいたってレチタティーヴォで初めて歌われます (ヨハネ福音書 20 章 19 節の前半の引用) :

同じ安息日の夕べ 弟子らつどいて、
人々を怖れしゆえ 戸を閉ざしおるに、
主イエス なかに入りたもう

また BWV 67 では、第 6 曲 (アリアと合唱) に、上の叙述につづく後半の場面、入ってきたイエスが弟子たちに語りかける第一声 (バス=イエス) :

安らかなれ 汝 (なんじ) ら

が、くり返し歌われていますが、これは、イエス復活の翌週の出来事ではないのです。歌詞の〈同じ安息日の夕べ〉 (そのまま BWV 42 の題名にもなっています) には問題があり、後の各論で触れますが、聖書によると、その同じ日、すなわちイエスの亡骸が墓から消え、婦人たちがそれを弟子たちに報告しに帰った、その同じ日のことでした。

この 2 つのカンタータを味わうには、ヨハネ 20 章の全文 (イエス復活する、マグダラのマリアがイエスに出会う、イエスが弟子たちの集う部屋に現れる、トマス の 不 信 仰) に 目 を お 通 し いた だ く こ と を お 勧 め し ます。その上で、ユダヤ人たちの追及と捕縛への恐れ、突然に引率者を失った不安と息を潜めている弟子たちの表情、その部屋の緊張とを想像してみましょう。

つぎに、制作の時期に注目してみます。

BWV 42 は 1725 年、BWV 67 はその前年 1724 年に初演されています。この両年は、バッハがライプツィヒ

での職務 (市の音楽監督、トーマス・カントル) を開始して間もない時期で、カンタータ制作の勢いたるや驚異そのもの。ほぼ毎週 1 曲のペースで人類史に残る傑作を生産し、合唱隊の少年たちに教え込み、オーケストラとともにその週の礼拝で実演したのです。

前回 BWV 6 の項に、1725 年の受難週の始まり (3/25) から復活節の祭日 2 日目 (4/2) までの 1 週間強の制作日程をかかげました (4 月号 p. 3)。その中の、3/25 初演の作品が、フィリップ・ニコライのコラール〈あしたに輝く 妙なる星よ〉で名高い BWV 1 であったこと、そしてバッハのライプツィヒ第 2 年次 (1724 年 6 月 - 1725 年 5 月) のコラール・カンタータ連作が、この曲をもって中断されたことを指摘しました。

中断の理由は分かりません。年間に 60 曲ほどのカンタータ上演を義務づけられたカントル・バッハが、初年度の試行錯誤をへて第 2 年次では、「コラール・カンタータ」の様式の諸相を試し、「年巻」の完成をこころざしながら、その内の 40 曲目 (数え落としがなければ) で、連作を放棄してしまいます [昨年来、コロナ禍に翻弄されて延期・再延期の憂き目にあっている作品のうちの 3 曲、BWV 78、93、113 がこのグループに含まれます]。コラール・カンタータに関しては、今後、別の機会に何度も触れることになるでしょう。

ここでは、中断直後のカンタータ、前回とり上げた BWV 6 と今回の BWV 42 (BWV 6 の 6 日後に初演) で採用された、聖句で始まる様式に注目しておきます。

BWV 6 《とどまれ我らと 夕闇せまり》はルカ 24 章の引用から歌い出しましたが、BWV 42《同じ安息日の夕べ》はヨハネ 20 章からの引用で開幕します。

BWV 67 の場合は、その前年の作ですから上記のコンテキストからは外れますが、同暦日のための作品で、やはり冒頭合唱は、聖句：テモテへの第二の手紙 2 章 8 節を、そのまま歌います。

いずれも、つづく紹介でお確かめください。

月報 2021 年 5 月号 CONTENTS

- ・連載：退屈するのはいそがしい [3] (大野博人) …p. 4
- ・千葉写真館 (撮影：千葉光雄) ……p. 1、p. 3
- ・《聖書に出てくる地名》、お詫び (大村恵美子) ……p. 3

■カンタータ第 42 番《同じ安息日の夕べ》

Am Abend aber desselbigen Sabbats BWV 42

【教会暦】復活節後第 1 日曜日 (Quasimodogeniti) 用 (他に BWV 67)
 【使徒書】I ヨハネ 5, 4-10 (信仰は世に勝つ)
 【福音書】ヨハネ 20, 19-31 (イエスが弟子たちと不信仰のトマスに現れる)
 【成立】初演 1725 年 4 月 8 日、再演 1731 年 4 月 1 日、1742 年頃
 【歌詞】作者不詳。2) ヨハネ 20, 19 前半。4) ファブリーツイウスのコラール Verzage nicht, o Häuflein klein (怖るな 小さき群れ) 1635 頃、BCH-126 第 1 節。7) ルターのコラール Verleih uns Frieden gnädiglich (われらに平和を この時に給え) 1529 年、単一詩節+付加節 BCH-125。付加節はラテン語交誦 Da pacem Domine (平和を給え 主よ) のドイツ語訳。旋律：ラテン語聖歌 Veni redemptor gentium (いざ来たりませ 世の救い主) 4 世紀 BCH-97 が原型。
 【上演用訳詞】大村恵美子 <http://bachsmusik.starfree.jp/bwv042.htm>
 【編成】SATB、合唱、ob2、fg、str、bc

【楽曲構成】	訳詞冒頭句/原詞冒頭句	編成 (分)
1. シンフォニア	—	ob2, fg, str, bc (5)
2. レチタティーヴォ (T)	同じ安息日の夕べ Am Abend aber desselbigen Sabbats	fg, bc (1)
3. アリア (A)	二人また三人(みたり)の Wo zwei und drei versammelt sind	ob2, fg, str, bc (13)
4. コラール二重唱 (S/T)	怖るな 小さき群れ Verzage nicht, o Häuflein klein	fg, bc (2)
5. レチタティーヴォ (B)	われらに残されしかの日の Man kann hiervon ein schön Exempel sehen	fg, bc (1)
6. アリア (B)	イエス 盾となりて Jesus ist ein Schild der Seinent	vn/III, fg, bc (3)
7. コラール (合唱)	われらに平和を この時にたまえ Verleih uns Frieden gnädiglich	ob2, fg, str, bc (2)

(演奏時間 27 分)

【上演履歴】1991 (#69)、2018 (部分、目白聖公会 100 周年)
 【楽譜発行】2001 年「50 曲選」、ISBN978-4-925234-15-3 (¥1800)
 【録音】CD「50 曲選」Vol. 6 (1991 録音、#69)

この曲の表題には問題があります、と前文に書きました。原詞タイトルは Am Abend aber desselbigen Sabbats (この同じ安息日の夕べ：直訳) で、新バッハ全集でもわれわれのブライトコプフ版底本でも、こうなっていて、レチタティーヴォはこのとおりに歌い出します。

しかし、教会暦の指定箇所 (ヨハネ 20, 19 以下) は、日本語の現行の聖書にも、ドイツ語の福音派『ルター訳に基づく聖書』にも、「安息日 (Sabbat)」という単語は見当たりません。構文のその位置には「週の初めの日の (ersten Tages der Woche)」が置かれています。バッハの使っていた聖書では、上の表題のように書かれていたのに、いつの時点でか改訂されたということなのでしょう (詳細については、別の方の論にお譲りします)。バッハのテキストの場合にも、聖書学的な改訂にかぎらず、現代の政治的・社会的な、あるいは科学的知見による用語の問題は少なくありません。さすがに、曲名を変更するわけにはいかないようですが。

曲は、復活節を祝った直後の喜びのなかで、軽快で晴れやかなシンフォニアに始まりますが、明らかに、つづくテノールの語りだしの緊張感とのギャップをバッハは楽しんでます。その企みは、突然、通奏低音による 16 分音符の鋭い刻みとともに開幕し (第 2 曲)、〈同じ安息日の夕べ …… 主イエス なかに入りたもう〉と福音書が読み上げられます。

以下は、聖書の解説というカンタータの役割の面目躍如というべき楽曲の連なりかもしれません。イエス

が立ったのは〈二人またみたりの み名により集うただなか〉 (マタイ 18, 20)、と歌い出すのは、慈愛のアルト (第 3 曲アリア) です。冒頭と同じ編成が、一転して落ち着いたアダージョを奏でます。この慰めを引きとって、その〈二人またみたり〉がつづくデュエット (第 4 曲) の主役になります。歌詞はファブリーツイウスのコラール。ソプラノとテノールは、〈怖るな 小さき群れ〉と歌いながらも、実は自分たちが、戦々恐々として肩を寄せ合っている、といった図です。まだ救いの確信には至っていません。つづくバスのレチタティーヴォ (第 5 曲) は、主題の箇所をより内面化して語り直し、〈イエス 盾となりてかばいたもう み民を迫害より〉の勇ましい、勝利のアリアに流れ込みいきます (第 6 曲)。

最後のコラール (第 7 曲、ルター作) が〈われらに平和をたまえ〉を歌うころには、迷いのなかにいた信徒も (トマスも)、確信にいたっている、という仕組みでした。巧みに組み立てられた名品中の名品。

ちなみに、この終結コラールは、2 か月前のカンタータ (BWV 126、復活節‘前’第 8 日曜日用、日本語版楽譜未刊) でも、調性を替えながら、付加節ごとそっくり使用されたものです。そっくりとはいっても、和声付けはまったくの別物。バッハの和声法の勉強にはうってつけです。

■カンタータ第 67 番《留めよ心に 主イエスを》

Halt im Gedächtnis Jesum Christ BWV 67

【教会暦】復活節後第 1 日曜日 (Quasimodogeniti) 用 (他に BWV 42)
 【使徒書】I ヨハネ 5, 4-10 (信仰は世に勝つ)
 【福音書】ヨハネ 20, 19-31 (イエスが弟子たちと不信仰のトマスに現れる)
 【成立】初演 1724 年 4 月 16 日、再演年代不詳
 【歌詞】作者不詳。1) 第 2 テモテ 2 : 8「イエス・キリストを思い起こしなさい」(表題)。4) ヘルマンのコラール Erschienen ist der herrlich Tag (晴れの日 あらわる) 1560 年、BCH-36 第 1 節。6) ヨハネ 20, 19 の後半。7) エーベルトのコラール Du Friedefürst, Herr Jesu Christ (平和の君イエス まことの人) 1601 年、BCH-27 第 1 節。
 【上演用訳詞】大村恵美子 <http://bachsmusik.starfree.jp/bwv067.htm>
 【編成】ATB、合唱、cornoda tirarsi (hn ホルン/trp)、fltr、oba2、str、bc

【楽曲構成】	訳詞冒頭句/原詞冒頭句	編成 (分)
1. 合唱	留(と)めよ心に 主イエスを Halt im Gedächtnis Jesum Christ	hn, fltr, oba2 str, bc (3)
2. アリア (T)	わがイエス 生くれば Mein Jesus ist erstanden	oba, str, bc (2)
3. レチタティーヴォ (A)	わがイエス なれば死の毒 Mein Jesu, heißest du des Todes Gift	bc (1)
4. コラール	晴れの日 あらわる Erschienen ist der herrlich Tag	hn, fltr, oba2 str, bc (1)
5. レチタティーヴォ (A)	されどなお 残れるあだ Doch scheinest fast, daß mich der Feinde Rest	bc (1)
6. アリア (B) と 合唱 (SAT)	安らかなれ 汝ら / さちなり! Friede sei mit euch! / Wohl uns!	fltr, oba2, str bc (5)
7. コラール	平和の君イエス まことの人 Du Friedefürst, Herr Jesu Christ	hn, fltr, oba2 str, bc (1)

(演奏時間 14 分)

【上演履歴】1990 (#67)、2008 (#102)
 【楽譜発行】2007 年、ISBN978-4-925234-58-7 (¥1400)
 【録音】(市販品なし)

BWV 42 の 1 年前 (ライプツィヒ初年次) に初演されたのが、このカンタータでした。

ライブツィヒでは復活節前の6週間は齋戒期で、カンタータ演奏が控えられます。バッハは、その空き時間を活用して、着任後初の受難週「聖金曜日」(1724年4/7)のために、渾身の大作《ヨハネ受難曲》を書き上げ、聖ニコライ教会での初演を果たしました。つづく復活祭3日間のカンタータは、すべて前任地以前の旧作あるいはパロディーで間に合わせ、ようやくこの日(4/16)、復活節後第1日曜日のためのBWV 67で、週1曲の新作ペースに復したのです。

カンタータ《留めよ心に 主イエスを》は、輝かしくも活気にあふれた合唱で開幕します。思えば、作曲家は9日前まで、この日の聖書箇所の前日の、受難という重い、暗い出来事のテキスト(ヨハネ18章、19章)をめぐって音楽づくりに明け暮れていたわけですから、受難曲の完成、上演後の最初の創作の場面で、解放の喜びが爆発するのは当然でしょう。バッハの活動にとってみれば、遅ればせの復活祭当日用のカンタータだったわけです。

留(と)めよ 心に 主イエスを
よみがえりし 勝利の主

バッハがこの冒頭合唱に用いた歌詞は、しかしヨハネを離れます(第2テモテ2,8前半)。イエスの復活を、ただひとり信じるのできないトマス的心境になぞらえて、われわれに呼び掛ける聖句として、まさに相応しいものでしょう。ファンファーレ風の前奏に導かれた歌い出しは、3小節をついやして〈と・め・よ〉の3音を発声し(原詞では、halt [心に留めよ、覚えよ]、halt, halt と3回くり返す)、それを、弦の早いパッセージが、まさに心に刻み込むような動きで支えますが、この強烈な印象とともに、この音楽は忘れられない名曲になっています。

この曲では、使用楽器にも注目しましょう。コロノ・ダ・ティラルシ(Corno da tirarsi)は、ホルン(コロノ)の一種だそうです。現存せず、不詳とのこと。tirareが「引っ張る」の意味なのでスライド式か?ホルンやトランペットで代用します。

もう一つは、フラウト・トラベルソ(Flauto traverso、fltrと略記)。リコーダー(縦笛)をフラウトと称するのに対し、traverso「横位置の」フラウト、すなわちフルート(横笛)のこと。この楽器は、ドイツではちょうどこのころ普及し始めて、リコーダーを古風なものに追いやったのだそうです。バッハも、前任地ケーテンや、ご存じのとおり当地ライブツィヒでも、室内楽には盛んに起用しますが、教会カンタータではここで初めて用いました。

このように、実験的で多様な楽器使用による魅力的な合唱やアリアが連なりますが、中間と終結には、一転、単純な4声体のコラールが配置されます。ホッと息をつき、聴く者も、心のうちで自ずと和していることに気づくのです。

歌詞のことにもどりますが、指定された聖書箇所への直接の言及は、第6曲に至ってようやく現れます。前書きに述べたとおり、イエスの〈安らかなれ 汝ら〉という、力強くも慰めに満ちた語りかけでした。このBWV 67と、左のBWV 42、たまたま並んだこの2つの作品で、ヨハネ20章19節は完結しました。



千葉寫真館「春の花」
(千葉光雄・団員)

■左:ベニバナミツマタ
(紅花三稜。3本に枝分
かれする。和紙の原料に
使われた。黄花が多い)

■p.1:スズラン
(聖母マリアがキリス
トの十字架の足元に流
した涙、とか)

《聖書に出てくる地名》について、お詫び

大村 恵美子 (主宰者)

待ちに待った、この美しい5月の月報に、いきなり〈お詫び〉とは、不粋もいいところでしょう。私は、2月号月報(第705号)の第4ページ全面をとって、「聖書に出てくる地名」について、旧約聖書を含めると膨大なものになるので、「新約聖書150」として、表を作って皆様にお届けしました。そしてまた次の3月号には、急ぎ「新約聖書168」と訂正表を出したのです。

これには、若くて意識の固まらない過去から、「聖書全体にある地名を知りたい」という私の欲念は、深く存在していたものらしく、同じ3月号の第4ページ全面で、「エマオの出会い」という随想をのせて、この大好きな内容が、あの分厚い聖書中にただ1か所[マルコの並行箇所では地名なし]にしか触れられていないことを告げています。

しばらくの間、この際思い切って旧約も含めた、聖書全体を対象にしてみようかと、試し始めたのですが、これはさすがに、その数え方の複雑さに、無理なことがすぐわかりました。新約聖書だけでも、私の仕事の不徹底に自分自身でも気づき、さらに、慌ててお詫びを出したのも、あさはかに過ぎました。見落としだらけだったのです。この上は、新約聖書に限定して、ほんとうに確実なものを仕上げることにします。

地名へのこだわりが、皆さまにとっては、どれほどの興味があるかわかりませんが、私自身は「ああ、こんな地名があるんだ!こんな所で、あんな所で、いろんな出来事が起こったのだ!」という驚きを感じながら書きだしています。「専門書やコンピューターで検索すれば、あっという間に……」という声も、どこからか聞こえてきますが、構いません。

そして、出来れば、この7月の「東京バッハ合唱団」の誕生日(59回目)に、改めて納得できるようなものにして、皆さまにもプレゼントさせていただきたいと思えます。今度こそは、誤りのない正確な内容にし遂げる覚悟ですので、「またか——」というお気持ちでしょうが、どうか始めたことが最後までやり通せますように、ご期待いただければ幸いです。

(2021年4月20日)

招かれざる客

大野 博人 (安曇野閑人)

東京都内に住む知人がSNSで嘆いていた。

庭に来るシジュウカラたちのために餌箱を置いてひまわりの種を入れていた。ところが最近、セキセイインコが5羽も6羽もやってきて食い散らかすのだ、と。愛玩用だったインコが野生化して、かなり繁殖しているらしい。

読みながら、私は「セキセイインコならかわいいもんだ」とつぶやいた。

私も、安曇野の雑木林の中にある拙宅の庭に野鳥のための餌台をつくった。木々の間を飛び交うシジュウカラやコゲラなどの野鳥たちに庭先で羽を休めてもらいたいと思ったからだ。ひまわりの種などを置いてしばらくすると減っている。立ち寄る常連ができていくようだ、とよるこんだ。

ある日、ふと居間の窓から庭に目を向けると、台から餌を手づかみでむしゃむしゃと食べている奴がいた。シジュウカラでもセキセイインコでもない。サルである。

「こらっ」と大声を上げると、面倒くさそうにのそのそと去って行った。

近くの山にはニホンザルが棲んでいる。庭先で目撃したのはその中の1匹。拙宅の付近には家々が点在し、近くに商店や観光施設も少なくない。それでも連中は月に2、3回、姿を見せる。たいていは群れで降りてくる。

はじめて見たときはびっくりした。住宅の庭や林のあっちにもこっちにも。親ザルに負われた赤ん坊や、遊びざかりの子ザルもたくさん。

数えてみると20匹から30匹。子だくさんのバツハ一族みたいだ……。

人が暮らす周辺で食べるものをさがしに来るらしい。近くの旅館の人によると、入り口を閉め忘れると、侵入して土産物売りの袋菓子を盗っていくという。追いかけても、木の上などで袋をやぶいて菓子を食べる姿を見せつけられるだけ。頭にくると話していた。

うちにも、サルの親子が網戸を開けて入ってきたことがある。果物かごからリンゴを持って行かれた。一瞬の出来事だった。悔しい。

どんな対策があるか。犬がいれば、追い返してくれる。でも最近は、賢い柴犬など飼っている家は少ない。

「サルの天敵を増やせばいいのでは？」と思いつきを口にした私に、旅館の人は冷やかだだった。

「サルが嫌がるのは蛇です。マムシなんかこわがりますけど、そんなもん家のまわりにたくさん放すわけにいきませんから」

対策は限られる。私はおもちゃの鉄砲を買ってきて、

サルを見かけるとパンパンと撃ちまくる。サルは逃げるが、遠巻きに私を見ている。哀れむような視線を感じたのは気のせいだろうか。

近所の人はゴム仕掛けのパチンコを作った。うろつくサルをめがけて小石を飛ばす。

「尻に命中したときは快感ですよ。やってみませんか？」

快感は得られても、根本的な解決には遠そうだ。多分、この招かれざる客たちとの闘いに終わりはない。

長年、山や森で動物を撮り続けている信州の写真家に話をきいたことがある。日本では近年、野生動物がかつてないほど増えている、という。サルだけではない。シカもクマもイノシシも。農家が減って放棄された田畑は、雑草や雑木が茂りイノシシなどの巣になっていく。人の手が入らなくなった森林は動物たちで大にぎわい。

動物たちは人間が暮らす地域のすぐそばにまで縄張りを広げている。だから、野菜畑や果樹園の被害は広がるばかりだし、クマなどが人を襲う事件も増える。昨年、安曇野にもクマが出没した。現場はちょっとした住宅街だったり、わりと大きな小学校の近くだったり。人里離れた場所ではない。

動物たちが増える理由はわりとはっきりしている。人が減っているからだ。そのうえに高齢化もどんどん進む。あと3年ほどで、日本の人口の半分以上が50歳以上になる。漫談家の綾小路きみまろさんが「日本はジジイとババアの養殖場」と喝破していたのを思い出す。

人がじりじりと後退する。そこを見透かして、野生動物たちがしたたかに自分たちの領域を取り戻す。都会では、イノシシやタヌキが目撃されると珍事扱いのニュースにされがちだけれど、むしろ肅々と進む人間社会の衰退の兆候ではないだろうか。

知人はセキセイインコを、私はサルを追い払う。でも最後に追い払われるのは人間の方かもしれない。「招かれざる客」はセキセイインコだろうか、サルだろうか。なんだか自分のような気がしてきた。



■庭先にやってきたサル (写真も筆者)